

安楽寺だより

第54号

紙面内容

- 2面 二十二組同朋大会(別院対面所)
- 3面 定例法話勤める・北條義信師
- 4面 日本仏教史(補足)蓮如上人⑩

第13回 お釈迦さまの帰依者 スダッタ長者とジェーダ太子

インド東部マガダ国の都・王舎城から、ガンジス川を隔てて北西部にあるコーサラ国のシラーヴァステイー(舎衛城)に住むスダッタ長者が、商用で訪れたマガダ国で、お釈迦さまのうわさを聞き、竹林精舎の寒林(火葬場)にお住いのお釈迦さまにお会いされました。

お釈迦さまの教えに出遇われたスダッタ長者は、在俗信者になり、お釈迦さまに雨安居(うあんご)・雨季の間、修行者が一か所に留まっつての集団生活への申し入れをし、受け入れられました。

そして舎衛城に戻り、ジェーダ(祇陀)太子の所有するマンゴー林に精舎を建てたいと頼み込みました。ジェーダ太子は、最初「土地は黄金を敷き詰めても売らない」と拒否していましたが、司法大臣の裁定になり、次のように申しました。「土地はスダッタ長者に譲ったが、樹は私のものです。二人で精舎を建て、お釈迦さまに来ていただきましょう」と伝え、舎衛城近くの広大な敷地

祇園精舎の建立



祇園精舎跡

に立派な精舎を建てました。

スダッタ長者は日頃、給孤独(身よりのない孤独な者に食事を支給する)長者と呼ばれていました。そして、土地を譲ったジェーダ(祇陀)太子との二人の名前をとって「祇樹給孤独園精舎」略して祇園精舎(ジェータヴァアナ・ヴィハーラ)と呼ばれるようになります。

平家物語

祇園精舎 (序)

祇園精舎の鐘の聲 諸行無常の響きあり
 沙羅双樹の花の色 盛者必衰の理をあらはす
 おごれる人も久しからず 唯 春の夜の夢のごとし
 たけき者も遂にはほろびぬ 偏に風の前の塵に同じ

こうしてお釈迦さまの仏教教団は、コーサラ国における伝道布教の根拠地ができました。お釈迦さまは、四十五年間の伝道の中に祇園精舎へ六回雨安居に訪れておられます。(王舎城は二十二回)した。

編集・発行 安楽寺住職 吉田 和良
 名古屋市瑞穂区井戸田町一の八〇
 電話 〇五二(八四一)二六〇六

22組主催・4年ぶりに 同朋大会を開催

三月十六日、二十二組の同朋大会が開催されました。コロナ禍で四年ぶりの開催で、会場の東別院対面所には各寺院のご門徒さまにご参加いただきました。小島大真組長（大乘寺住職）の挨拶のあと、糸山公照師（熊本光照寺副住職）から、「ご門徒さんと考える寺院のための災害対策」と題してご講演をいただきました。

糸山師は、八年前の熊本地震での体験を通して「受縁力」（助けを求める人と助けたいと思う人との縁を結ぶこと）の大切さを、解りやすくお話されました。



講演される糸山公照さん

「今年元日に発生したマグニチュード7.6の能登半島地震では、石川県を中心に甚大な被害がありました。大谷派寺院は約八〇〇ヶ寺が被災しました。私は地震発生後、能登に入り、熊本で体験したことをお伝えしながら、炊き出しなどの活動に従事しました」

「家が崩壊する危険を感じたら、『自分の命・家族の命を守る、電気のコンセント・漏電ブレーカーを落とす、身の回りの非常用具と共にご本尊・過去帳を持ち出す、そして可能であれば被災状況を写真に収め、これからの寝る所を決めること』が大切です」



22組コーラス「百花繚乱」の皆様

講演の休憩時間に参加された皆様と体操をした後、糸山師は、「救援物資や義援金の支援と共に、被災した方々と助け合える人間関係をつくるのが最も大切なことです」とお話しいただきました。

講演の後、二十二組有志コーラスグループ「百花繚乱」（ひやつかりようらん）の皆様による復興ソング「花は咲く」の合唱、そして坊さん漫才「えしんりょう」による軽快な説法をお聞きし、出演者の皆様の熱演に元気をいただきました。



「えしんりょう」のお二人

定例法話を勤める



二月十三日、定例法話をお勤めしました。当日は暖かい陽気で、十二名の皆様にお参りいただきました。ご法話は北條義信氏（愛西市・明通寺住職）に御出講いただきました。

北條師は、『歎異抄第十三章』を通して、世のあり様についてお話されました。

『よきところのおこるも、宿善のもよおすゆえなり。悪事のおもわれせらるるも、悪業のはからうゆえなり』と申されるところは、縁はすべて外よりもたらされるものです。縁は私のはからいを越えたところにあり、私のおもいどおりにはいかないものです。親鸞聖人は『さるべき業縁のもよおせば、いかないふるまいもすべし』と人間のあり様を申されています。

「縁は外よりもたらされるもの」

今年元日の午後、大きな地震がありました。能登半島は自然豊かなところですが、珠洲市・輪島市・能登町は大変な被害に見舞われました。私は縁がありまして、能登町のコミセンに寝泊まりし、ボランティア活動に参加してきました。もし珠洲原子力発電所ができていたら、福島県のように大災害に見舞われていたのではとゾツとしました。自然災害は日本中どこで起きても不思議ではありません。能登では、人との出会いの大切さを強く感じました。

聖人は、流罪の地・越後(新潟)で赦免の後に京には戻られず、人との出会う縁を求めて関東に行かれました。常陸国(茨木県)に住まれ、その後二十年間、関東各地の人々にお念仏の教えをお伝えされました。

著書『教行信証』は、聖人のこうした体験があったから、この地で完成されたのだと思います。

能登半島地震 義援金のお礼

二月十一日の佛佳会総会・十三日の定例法話の折、ご出席の皆様にお願いたしました義援金33,850円は、名古屋教務所を通して、石川県に届けさせいただきました。ご協力いただきましたまして誠に有難うございました。

春彼岸お墓まいり

三月十四日、八事霊園安楽寺墓地において、春の彼岸墓法要をお勤めしました。寒気が残る日和でしたが、朝から多くの皆様にお参りいただきました。



午前十時三十分からの永代供養墓法要には、八〇名余の方々にお集まりいただきました。

墓前で読経する中、彼岸にご往生された亡き方を偲んでお焼香をしていただきました。ご参拝いただき誠にありがとうございました。

仏教豆知識

第五十四回



日本仏教史

補足 蓮如上人⑩

末代無智の御文

末代無智の、在家止住の男女たらんともがらは、こころをひとつにして、阿弥陀仏をふかくたのみまいらせて、さらに余のかたへこころをふらず、一心一向に、仏たすけたまえともうさん衆生をば、たとい罪業は深重なりとも、かならず弥陀如来はすくいますべし。これすなわち第十八の念仏往生の誓願のこころなり。かくのごとく決定してのうえには、ねてもさめても、いのちのあらんかぎりには、称名念仏すべきものなり。あなかしこ、あなかしこ。

今は、ほとけさまの教えはありますが、行ずる人も証する人もいない末法の時代であります。このような世の中に生きるわれわれが真実の人生を得るためには、思い惑うことなく、阿弥陀仏の真実の教えに照らされて、その他の道

に目をそらさず、ひたむきにお念仏を抛りどころとして、生きるよりほかの道はありません。

たとえ、わが身が罪業の深い身であると思ひ、苦しむことがあるうとも、かならず何ものにも妨げられない救いの道が開かれてきます。それが阿弥陀仏のご本願（自分の立場や経験だけでなく、共に生きる生き方こそ、求める道であったと目覚めさせるはたらき）の中で誓われている事実であります。

その事実を深く信じて、人生のよろこびを得たうえには、ねてもさめてもいのちある限り、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏のお念仏がわが身の事実を気付けてくれると思ひ、称名念仏すべきであります。

（御文五帖目第一通）



蓮如上人肖像（東本願寺所蔵）

先日、中日新聞夕刊に「ガラスのうさぎ」の著者・高木敏子さんのインタビュー記事が掲載されました。▼高木さんは東京大空襲（一九四五年三月十日）で本所区（今の墨田区）の自宅を消失されて、母と妹二人を亡くされました。後日自宅の焼け跡から、江戸切子ガラス職人の父が作られた高熱で溶けてしまったガラスのうさぎが見つかった▼当時女学生だった高木さんが、少女時代の体験をつづつた「ガラスのうさぎ」は、一九七七年に出版後244万部を超える大ベストセラーになりました。▼「戦争が起きれば、敵も味方も死んじゃうのよ。悲しみしか生まれないわ。わたしの証言をとおして、戦争の無惨さや虚しさ、また命の尊さを知ってほしいと願っています。あの戦争で亡くなった大勢の人たちの代弁者となって、戦争を語りついでいくことが、わたしに与えられた使命だと思うのです」▼いまウクライナをはじめ世界で連日空爆が続く、住民の殺戮が行なわれています。「戦争を起こそうとするのは人の心、起させないようにするのも人の心」と話される高木さんのメッセージをしっかりと受け止め、平和の尊さを訴えることを続けたいと思います。